

クローズアップ Close-UP 女性とオフィスと仕事を考える

日本の市内通信市場に挑戦するKVHテレコム。
そのベンチャー企業特有の闊達な気質・風土のなかで、
自らにチャレンジしていくことを課した女性たち。
パワフルに、そして、しなやかに働く女性ワーカーと、
彼女たちの活躍を支えるオフィスとの関係。

KVHテレコム株式会社

あじかたけいこ
広報部 味方恵子さん

ありたその
ネットワーク技術本部 有田素乃さん

会社の中心で 活躍する女性

KVHテレコムは、米国投資信託大手、フィデリティ・グループ傘下の外資系通信企業。日本初のCLEC（シーレック：競争的市内通信事業者）である。同社の社名は『Key Venture Holdings in Telecommunications』の略称で、通信分野の“中核”となることを期して命名された。



味方 恵子さん

昨年4月、第一種電気通信事業者免許を取得。東京大手町・丸の内をはじめ、ビジネスエリアの中心部に独自の光ファイバーネットワークの構築を開始した。高品質な通信サービスを、競争力のある価格で企業に提供するという同社の事業は、現在、日本の通信市場で大きな注目を集めている。

今号は、本年7月のサービス開始に向けて着々と準備が進むなか、その中心的な役割を担う2人の女性にご登場いただいた。

有田素乃さんは、ネットワーク技術本部に所属。通信ネットワークの中核となる東京・赤坂の通信センターの設計に携わっている。彼女の役割は、システム構築からファシリティのデザインまで、センターの運営に関わる一切。「各部門のニーズを一つのシステムにまとめあげるのは、根気のいる仕事です。また、通信センターは、P

Rの一環としてショールームの役割ももたせていますので、空間デザインから什器の選定まで、考慮しなければならないことが多岐にわたります。

一方、味方恵子さんは、広報担当。「有田をはじめ、当社の技術陣が創り出した高品質な通信サービスを、より多くのお客様に、よりの確に理解していただくのが私たちの仕事。どんなにいいサービスを開発しても、それを知って、使ってもらえなければ意味がありませんので、責任の重みを感じます」。

チャレンジしていくことが 求められる環境

さて、重要な役割を担う彼女たちだが、有田さんは大使館勤務からの転職。味方さんは、放送局、議員秘書などを経験した後、同社の広報部に転身した。まったく異



質な分野からチャレンジした彼女たちは、現在の仕事をどのように捉えているのだろうか。

「当社は出来たての会社ですから、当然、社会的な認知度も低い。広告から取材の対応、営業ツールの作成など、やるべきことが山積しています。かなりハードですが、自分の意見を通すこともできますし、やりたいことを自由にやらせてもらえます」(味方さん)。

「大学の専攻は文科系でしたが、もともとコンピュータに興味がありました。今は、仕事をしながら学び、勉強しなければ仕事にならない、といった状況ですので、いいサイクルになっています」(有田さん)。

2人とも口をそろえるのが、やりがいの大きさ。その背景にあるのは、与えられた業務をこなすのではなく、自らチャレンジして仕事を創る楽しさ。そして、自らの

成長が会社の成長へ結びついていることを実感できる環境であろう。肥大化し、硬直化した大手キャリアでは体験できないベンチャー企業独特の醍醐味を実感しながら、彼女たちは生き生きと輝いている。

経営ポリシーが 感じられるオフィス

さて、最後に、現在のオフィスについてインタビューしてみた。

「一番気に入っているのは、椅子。私の業務はデスク作業が中心ですから、生活の中で最も長い時間を椅子に座って過ごすことになります。この椅子はハーマンミラー社製のものですが、とても機能的で疲れにくい」(有田さん)。

「当社には、“大切なものは、従業員、顧客、株主”という経営哲学があります。つまり、最初に位置づけられているのが従業員なんです。椅子だけでなく、木目調

の素材を使ったパネルや空気清浄機の設置など、快適に過ごせるオフィス環境だと感じます。その分、がんばらなければ、と(笑)」(味方さん)。

社員の満足が顧客サービスの源泉となり、会社の利益につながる、という企業理念。たった一脚の“椅子”にも、そのポリシーが投影されたオフィス。そして、そこで活躍する女性たち——企業とワーカーとオフィスとの良好な関係が、そこにあるように思えた。



有田 素乃さん